三人の訪問者

三人の訪問者

原作　島崎藤村
戯曲　黒岩力也

島崎春樹
冬
初雪
貧しい

島崎春樹がいる
冬が来る

島崎春樹　冬が　訪ねて来た　私が待受けて居たのは　正直に言うと
もっと　光沢（つや）のない単調な　眠そうな貧しそうに
震えた醜く　しわがれた老婆であった　私は自分の
側に来たものの顔を　つくづくと眺めて　まるで自分の
先入主となった物の　考え方や自分の　予想して居たものとは
反対であるのに驚かされた私は尋ねて見た　お前が冬か
冬　そういう　お前は一体私を　誰だと思うのだ　そんなに
お前は私を　見損なって居たのか
島崎春樹　と　冬が答えた　冬は私に　いろいろな樹木を指して見せた
冬　あの満天星（どうだん）を　御覧
島崎春樹　と　言われて見ると旧い霜葉はもう　疾（と）くに落尽して了ったが
茶色を帯びた細く若い枝の　一つ一つには既に　新生の芽が見られて
そのみずみずしい光沢のある　若枝にも勢いこんで
出て来たような新芽にも冬の　焔が流れて来て居た
冬　満天星　ばかりではない　梅の素生（すばえ）は　濃い緑色に　延びて
早や一尺に　及ぶのも　ある　ちいさくなって　蹲踞（しゃが）んで
居るのは　躑躅（つつじ）だが
島崎春樹　でも　がつがつ震えるような様子はすこしも見え　ない
冬　あの椿の樹を　御覧
島崎春樹　と　冬が私に言った
冬　日を受けて光る冬の　緑葉には言うに　言われぬ
かがやきがあって　密集した葉と　葉の間からは
大きな蕾が　顔を出して居た何かの
深い微笑の　ように咲くあの椿の花の中には
霜の　来る前に早や開落したのさえあった

島崎春樹　冬は私に八つ手の　樹を指して見せたそこにはまた白に近い淡緑の
色彩の　新しさがあってその力の　ある花の　形は周囲の単調を破って
居た三年の間私は異郷の　客舎の方で暗い冬を送って来た
寒い雨でも来て障子の　暗い日なぞにはよくあの巴里の冬を　思出す
冬　そこでは一年のうちの　最も日の短いという冬至前後になると
朝の九時頃に漸く　夜が明けて午後の　三時半には既に日が
暮れて了ったあのボオドレエルの詩の　中にあるような赤熱の
色に燃えてしかも　凍り果てるという太陽は必ずしも　北極の
果（はて）を想像しない迄も巴里の　町を歩いて居てよく
見らるるもの　であった

島崎春樹　枯々とした　マロニエの並木の間に冬が　来ても青々として枯れずに居る
草地の眺めばかりは特別な　冬景色ではあったけれども
冬　あの灰色な深い静寂な　シャヴンヌの冬の色調こそ　彼地の自然には
ふさわしいものであった　久しぶりで東京の　郊外に　冬籠りした　冬の
日の光が屋内まで　輝き満ちるようなことは　三年の旅の間なかったことだ

島崎春樹　この季節に　底青く開けた空を望み得るということも
冬　めずらしい

島崎春樹　私の側へ来てささやいて居たのは　たしかに武蔵野の冬だった
冬はそれから毎年のように訪ねて来た　が　麻生の方で冬籠りするように
成ってからは　一層この訪問者を見直すようになった　冬で思出す　かつて
信濃で逢った冬は私に取って一番親しみが深い　毎年五ヵ月の長い間も
私は冬と一緒に暮らした　けれどもあの山の上では
冬　一切のものは　皆な潜み　隠れてしまって

島崎春樹　ついぞ私は冬の笑顔　というものを見たこともなかった
冬　十一月の上旬といえば　早や山々へは初雪が　来た

初雪が来る

初雪　そして暗く寂しい雪空に　日のめを仰ぐことも稀な頃になると
浅間のけぶりも隠れて見えなかった　千曲川の流れですら氷に閉された

島崎春樹　私の周囲には　降りつもる深い溶けない一面の雪があるばかり　で　あった
冬　その雪は私の　旧い住居の　庭をも埋めた　どうかすると
北向の　縁側よりも庭の　雪の方が高かった　軒に垂れる
剣のような　氷柱（つらら）の長さは　二尺にも　三尺にも及んだ
長い寒い夜なぞは　凍み裂ける部屋の　柱の　音を聞きながら唯もう
穴に隠れる虫の　ようにちいさくなって　居た

初雪　この冬が私には　先入主になってしまった
島崎春樹　私はあの山の上で七度も　冬を迎えた
初雪　私の眼に映る冬は　唯灰色のものだった　巴里の方で逢った冬は
それほど雪深いものではなかったが　でも灰色な色調に於いては
信濃の山の上に劣らなかった
島崎春樹　私は遠い旅から帰って　久しぶりで　自分のところへ訪ねて来て呉れたものの
顔を　見た時
初雪　それが冬だとは奈何（どう）しても　信じられないくらいに思った
島崎春樹　遠い旅から帰って　三度目の冬を迎えた年ほど私も　常盤樹の若葉を
しみじみとよく見たためしはなかった
冬　今まで私は　黄落する霜葉の　方に気を　取られて
初雪　冬の初めに見られる常盤樹の新葉には　それほどの注意も払わずに居た
島崎春樹　あの初冬の若葉は　一年を通して樹木の世界を見る
初雪　最も美（うる）わしい　ものの一つだ
島崎春樹　冬はその年も　槇の緑葉だの
初雪　紅い実を垂れた万両なぞを
島崎春樹　私に指して見せた
初雪　万両の実には白もあるああいう　濃い珠のような光沢は
島崎春樹　冬季でなければ見られない
冬　あの槲（かしわ）の樹を　御覧
島崎春樹　と云って　冬がまた私に指して呉れたのを見ると
冬　黒ずんでしっかりとした　幹や細くても　強健な姿を失わないあの枝は
初雪　まるでゴシック風の建築物に見る感じだ
冬　おまけに　冬の日をうけた　槲（かしわ）の若葉には
島崎春樹　言うに言われぬ深いかがやきがあった　冬は　私に言った
冬　お前は是までそんなに私を　見損なって居たのか　今年は
お前の小さな娘のところへ土産まで持って来たあの児の
紅い頬辺（ほっぺた）もこの私の　こころざしだ
と
島崎春樹
初雪　貧（まずしい）が訪ねて来た

貧しいが来る

初雪　子供の時分からの馴染のような顔付をした
島崎春樹　斯の　訪問者が
冬　復た忸々（なれなれ）しく私の側へ　来た

島崎春樹　正直に言うとこの足繁く訪ねて来る客の　顔を見る度に
私は冬以上の醜さを　感じて居た
お前とは　旧い馴染だ　とでも言いたげな
この客に対したばかりでも私の　頭は下ってしまった
とても私には長くこの客を眺めては居られなかった　その私が
自分の側へ来たものの顔を　よく見て居るうちに
今迄思いも　よらなかったような　優しい微笑をすら見つけた
私は以前に冬に言ったと同じ調子で
冬　この客に尋ねて　見ずには居られなかった
島崎春樹　お前が貧か
貧しい（微笑む）そういうお前は　私を誰だと思うそんなに長くお前は　私を
知らずに居たのか
冬　と　貧が答えた
島崎春樹　めずらしいことだ　今迄私は　お前の笑顔というものを見たこともない
お前にそんな笑顔があろうとは　思って見たことすら無い
私はお前が笑わないものだとばかり思って居た　稀にお前に笑われると
私は身が縮むように　厭な気がしたものだ　唯私はお前に
忸（なれ）たかしてお前が側に居て呉れると一番安心する
初雪　斯う私が言うと　貧は笑って
貧しい　私に忸（な）れてはいけない　もっと私を尊敬してほしい　よく私に
清いという言葉をつけて　清貧（せいひん）と私を呼んで呉れる人もあるが
ほんとうの私は　そんな冷かなものでは無い
私は自分の歩いた足跡に　花を咲かせることも出来る
私は自分の住居を　宮殿に変えることも出来る
私は一種の幻術者だ　斯う見えても
私は世に所謂　富（とみ）なぞの　考えるよりは
もっと遠い夢を見て居る
冬　老（おい）が　訪ねて来た
島崎春樹　これこそ私が貧以上に醜く考えて居たものだ　不思議にも
老までが私に　微笑んで　見せた私はまた
貧に尋ねて見たと　同じ調子でお前が老か
と　言わずには居られなかった
初雪　私の側へ　来たものの顔をよく見ると　今迄私が胸に　描いて居たものは
冬　真実の　老ではなくて萎縮であったことが　分って来た
貧しい　自分の側へ来たものはもっと　光ったものだ
島崎春樹　もっと難有味のあるものだしかし斯の　訪問者が

初雪　私のところへ来るようになってから
冬　まだ日が浅い
貧しい　私はもっとよく話して見なければ
島崎春樹　ほんとうに斯の　客のことは　分らない唯私には
老の微笑　ということが分って来た　だけだ
初雪　どうかして私は　この客を　よく知りたい
冬　そして自分もほんとうに
貧しい　年を取りたいものだと思って　居る
島崎春樹　まだ誰か訊ねて　来たような気がする
初雪　それが私の　家の戸口に　佇（たたず）んで　居るような
冬　気がする私はそれが
貧しい　死であることを
島崎春樹　感知するおそらく私が　以上の三人の訪問者から
初雪　自分の先入主となった　物の
冬　考え方の　間違って居たことを　教えられたように
貧しい　死もまた　思いもよらないことを
島崎春樹　私に　教えるかも　知れない……。

おわり

（戯曲化に際しｗｅｂの青空文庫、テキストデータを使用した）